

まちの情景と建築

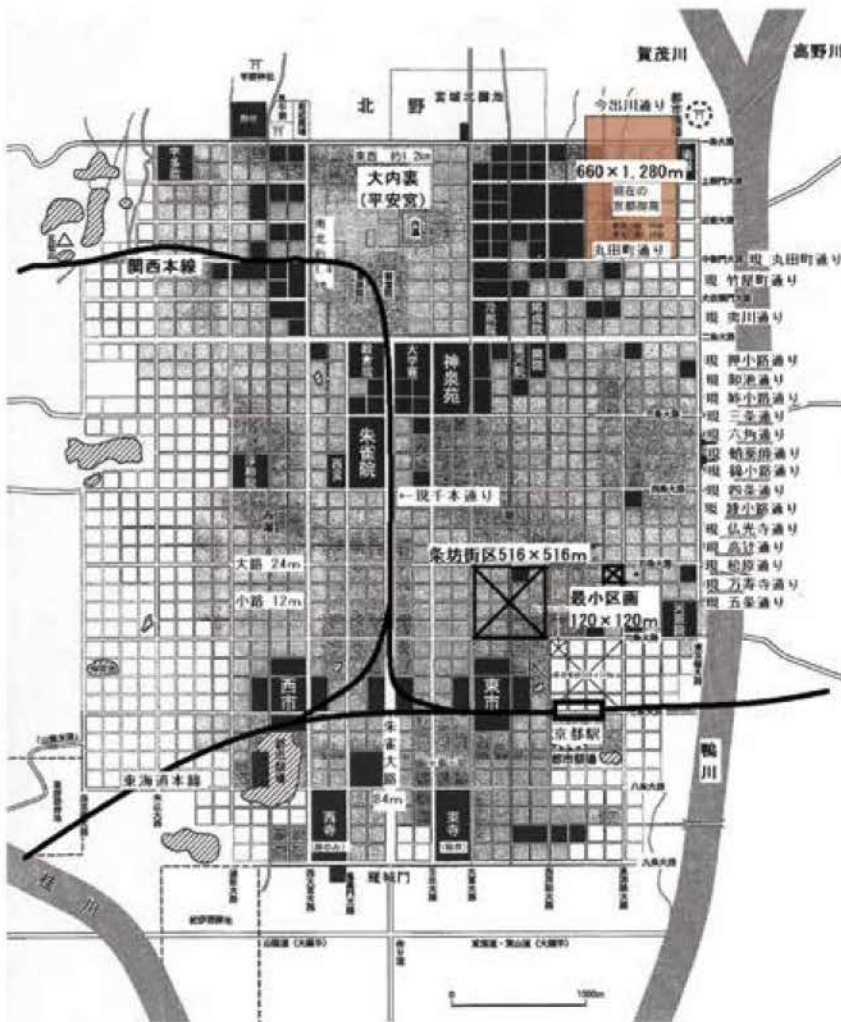
田中 修一

日本編

都市計画

平安京遷都

京の町割り



嘗て都は天皇が変わるたびに移っていた。天武王朝の始めも、天武は奈良の飛鳥浄御原、持統が藤原京と移転する。しかしそれではインフラ整備がいつまでたっても蓄積できないと、次に移った平城京はAD710年の造営で74年間使うことになった。元明⇒元正⇒聖武⇒孝謙⇒淳仁⇒称徳(孝謙が重祚)と天武系が続く。その後を受けたのが光仁天皇(天智の第7皇子志貴皇子の第6皇子)。天智系の復活だ。

光仁の子が第50代桓武天皇になる。彼は南都六宗の政治介入を嫌ったとするのが遷都の表向きの理由になっているが、天武系が造った都をそのまま使うことを嫌ったのが本音だろう、AD784年長岡京(京都市の西隣にある現京都府向日市)に遷都する。しかし藤原種継暗殺事件の嫌疑で餓死した弟早良親王の祟りで、都も皇室も異変続きで居たたまれず、隣町に引っ越す。それが平安京である。AD794年に遷都したとき、桓武はその都が1200年も続くとは想像もしなかっただろう。長かった平城京でも74年(実は聖武は自分で都を造ろうとさまよった。その5年を引けば69年)なのだから。図は平安京初期の区画割と、現在の京の市街を重ねたものである。常に戦乱の渦中にさらされたことの表れとして、内裏はその都度転々とし、現在は東北の角に追い込まれた形になっている。また、街区中央から西側は湿地帯であったところを無理に造成したため、50年と保てず東半分だけが残った。現在の千本通りが嘗ての朱雀大路に当たる。なお図の右側に「あねさんろっかく-」のわらべ歌に出てくる通りの名を付けておいた。五条通りを除いて大路の名称は変わっていないことが分る。さすがに伝統の京である。

桓武の祖父志貴皇子は、政治的才能も大いにあった人物だが、持統天皇に睨まれては命が危ないと悟り、一切表立たず、和歌の道にいそしんだ一生を送る。万葉集に「石ばしる 垂水の上のさ蕨の 萌え出づる春に なりにけるかも」の名句を残している。そのおかげで天智朝の系統は現在まで続き、京も生き延びた。但し都も天皇も東京に移ってしまったので、明治政府は時代祭と平安神宮を京都の人々へ置き土産にした。三大祭として人気を博している。

桓武の祖父志貴皇子は、政治的才能も大いにあった人物だが、持統天皇に睨まれては命が危ないと悟り、一切表立たず、和歌の道にいそしんだ一生を送る。万葉集に「石ばしる 垂水の上のさ蕨の 萌え出づる春に なりにけるかも」の名句を残している。そのおかげで天智朝の系統は現在まで続き、京も生き延びた。但し都も天皇も東京に移ってしまったので、明治政府は時代祭と平安神宮を京都の人々へ置き土産にした。三大祭として人気を博している。

